

新島襄の生涯 (1)

同志社大学 神学部教授
良心学研究センター長
小原 克博

1

Overview

1. 新島襄を「知る」
2. 「新島 七五三太」の時代
1843~1864年
3. 今回の課題

2

1

新島襄を「知る」

3

新島襄を語る視点

- 新島理解は時代の影響を受けてきた
 - 戦中：愛国者としての新島襄（特に徳富蘇峰）
 - 戦後：民主主義者・自由主義者としての新島襄
 - 1990年代以降：「良心教育」の創始者としての新島襄

4

愛国者としての新島襄

「凡そ先生程日本を愛した人は無い。同志社を創つたのも、日本を愛したから創つたのである。日本を救はんがために創つたのである。」



徳富蘇峰「新島精神と日本精神」（徳富蘇峰『新島襄先生』32頁）

5

新島先生永眠50周年記念事業 (1940年)

「新島先生が明治の実利主義的大勢に抗して勇敢に標榜せられた精神主義は、**儒教**によって洗練された我国の伝統的精神主義を、**基督教**によつて深めたものであった。」（魚木忠一・講演「教育の源流として見たる新島先生」、『同志社百年史』1169頁）

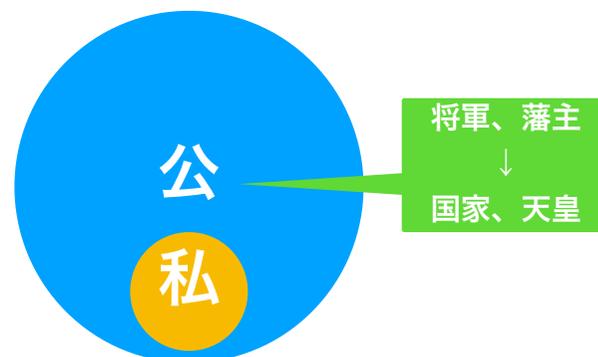
6

【参考】 儒教と新島襄

「而してかくのごとき教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得べき者にあらず、また既に人心を支配するの能力を失うたる**儒教主義の能くすべき所にあらず**、ただ上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信じ、**基督教主義**をもって徳育の基本と為せり。吾人が世の教育家とその趨を異にしたるもここに在り。」（「同志社大学設立の旨意」1888年、『新島襄 教育宗教論集』21-22頁）

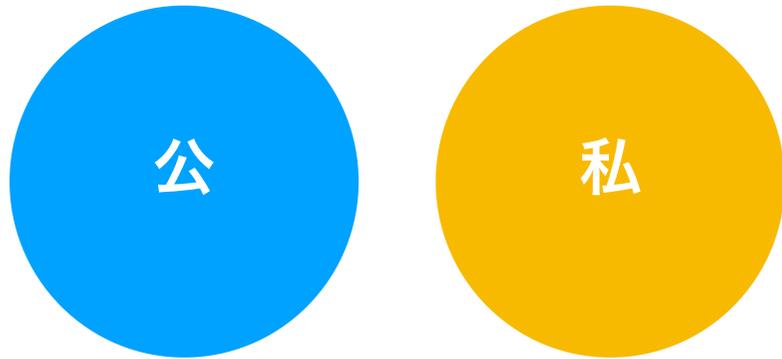
7

新島のアイデンティティの変化



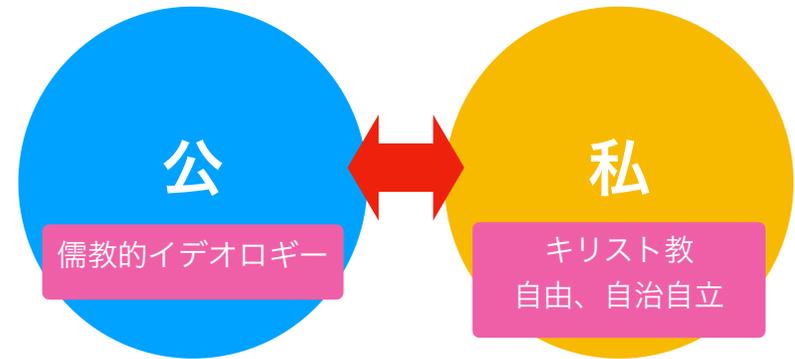
8

新島のアイデンティティの変化



9

新島のアイデンティティの変化



10

新島 襄の生涯

自らの「生き方」を考えるロール・モデルとしての新島 襄

1. 「新島 七五三太（しめた）」の時代
2. 「ジョゼフ・ニイシマ」の時代
3. 「新島 襄」の時代

12



1843
誕生



1864
脱国



1890
死去

11

2

「新島 七五三太」の時代 1843～1864年

13

サムライの子として

- ・ 父・民治は安中藩士、職務は祐筆（書記）
- ・ 新島は「サムライ」の子。「サムライ」
としての自己理解を持つ。
- ・ 藩邸での生活
 - ・ 一辺が約125メートルのほぼ正方形の中

15

新島の誕生

- ・ 1843年、江戸の安中藩邸で生まれる。
- ・ 上州（群馬県）系江戸っ子
- ・ 21歳まで藩邸内で暮らす。

14

旅の経験（1）

- ・ 安中への旅
 - ・ 1861年、19歳のとき
 - ・ 藩主の護衛として

16

旅の経験（2）

- 玉島（現在の倉敷市）への航海
- 1862年、20歳のとき
- 自由を満喫する。
- 「家出」「脱国」願望が高まる。

17

密出国への刺激を与えた書物（1）

- 『連邦志略』
- 中国に派遣されていたアメリカ人宣教師（ブリッジマン）が漢文で書いた。
- 大統領選挙を知り「脳がとろけ出そう」になるほど驚嘆。

18

密出国への刺激を与えた書物（2）

- 『ロビンソン・クルーソー物語』
- 「冒険」への野望を駆り立てられる。
- その他の書物
- キリスト教にも触れる。

19

密出国（1864年）

- 快風丸への乗船
- 出港準備は一週間。
- 一年間の函館留学が名目。

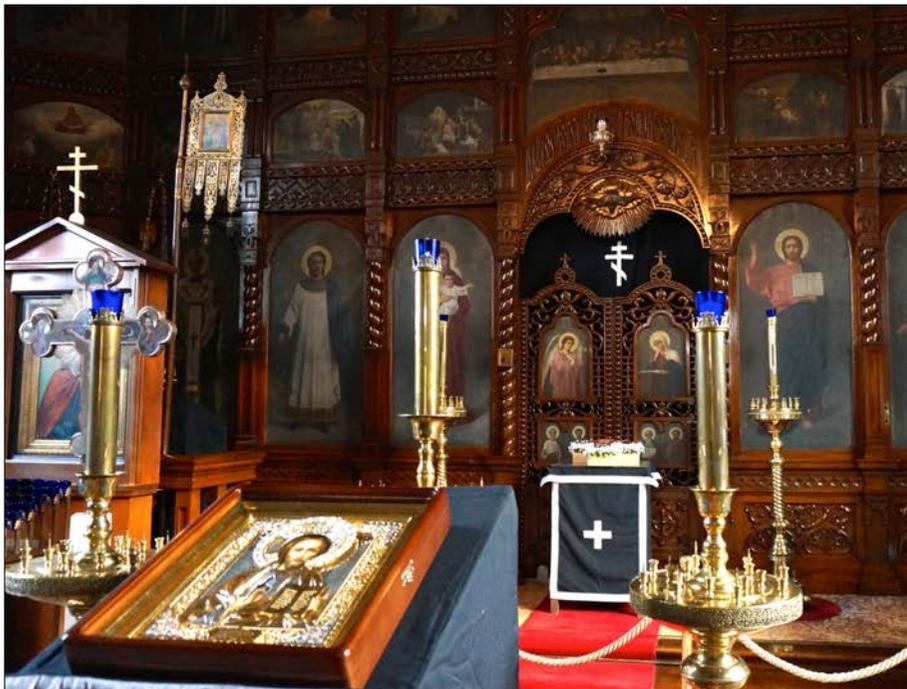
20

函館から上海へ

- ・ニコライ神父（ハリストス正教会）との出会い
- ・ベルリン号（セイヴォリー船長）に乗船。



22



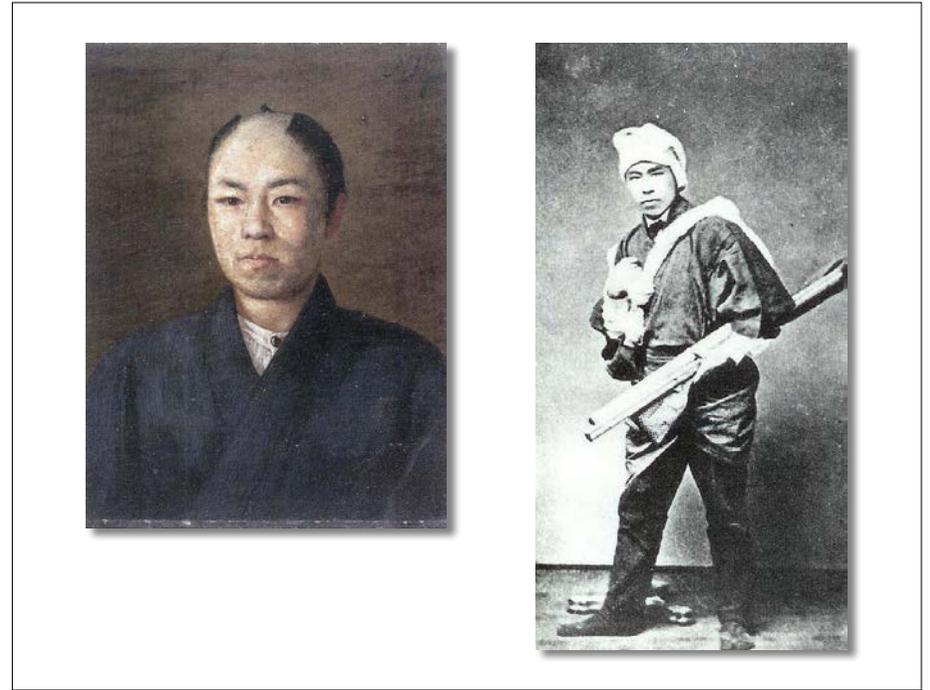
23



24



25



26

上海からボストンへ

- 上海からボストンへ
- ワイルド・ローバー号（テイラー船長）に乗船
- 太刀を船長に船賃として渡し、小刀は買ってもらった（漢訳聖書を買うため）。
- 「ジョー」（Joe）と呼ばれる。



27



28

3 今回の課題（800字）

- ・今回学んだことを踏まえ、なぜ新島襄が危険を冒して、脱国を決意したのか、述べてください。